

令和元年5月31日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02131

研究課題名(和文) マニエリスム形成期における記憶術の影響についての研究

研究課題名(英文) A Study on the Influences of Art of Memory in the Formation of Mannerism

研究代表者

足達 薫 (Adachi, Kaoru)

弘前大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60312518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：マニエリスム期のイタリア美術における視覚的特異性(主題の異種混交性、視覚的構造の非首尾一貫性、誇張されたイメージ)の源泉のひとつが記憶術の伝統及び方法であるという仮説のもと、本研究では、具体的な主要作例(コレッジョとアラルディによるサン・パオロ修道院装飾、パルミジャーノのフォンタネッラート装飾など)の分析を通じて、美術と記憶術の構造的同調及び影響関係を解明し、著作及び論文として成果を発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在、美術史におけるマニエリスムという概念の正当性及び有効性が疑問視され、特にその源泉となった思考を実証的に特定することが課題となっている。本研究では、16世紀前半における具体的な美術家とその作品に関する調査分析を通じて、マニエリスムの諸特質(主題の異種混交性、空間の分割ないし解体と再配置、イメージの誇張や先行する図像の伝統の改変)の源泉の一つが、同時代における記憶術的思考にあったことを解明し、著作及び研究論文として発表した。本研究が提案する、マニエリスム再定義という課題に資する仮説とそれを支える具体的な情報は、マニエリスム研究をさらに一歩前進させることに寄与したと述べる事ができる。

研究成果の概要(英文)：Under the hypothesis that the tradition and method of Art of Memory is one of the sources of visual specificity (the subject's heterogeneity, visual structure inconsistencies, exaggerated images) in Italian art of the Mannerist period, researcher analyzed and clarified the structural synchronization and influence of Art of Memory through the analysis of specific major works (such as the San Paolo Monastery decoration by Correggio and Araldi, Parmigianino's Fontanellato decoration, etc.). These results were presented as works and papers.

研究分野：美術史

キーワード：マニエリスム 記憶術 魔術 イタリア ルネサンス コレッジョ パルミジャーノ 美術史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者である足達は、基盤研究(C)「マニエリスムの時代の目：ジュリオ・カミッロの美術論の再構成に基づく」(2010~2014年度)において、16世紀前半のイタリア美術において顕在化し、18世紀以降マニエリスムと規定された特異な美術様式に注目し、その特異な特徴(主題の異種混交性、視覚的構造の非首尾一貫性、誇張されたイメージ)の源泉となった思考を、文献学の方法を用いて実証的に特定することに挑んだ。その実証のために注目された素材が、同時代の人文主義者ジュリオ・カミッロ(1480年頃-1544年)が残したテキストおよび彼が構想し実現した「記憶の劇場」(七つの惑星原理に基づいて宇宙の多様な要素をイメージ化して配列する装置)であった。この研究の結果、カミッロの美術およびイメージ一般に関する思考にはマニエリスムの諸特質と同調する要素があることが明らかとなってきた。

2. 研究の目的

こうした研究背景から必然的に浮上してきたのが、より具体的かつ現存する美術作品ないし美術的プロジェクトにおける記憶術的思考の反映、ないしそれとのアナロジーを実証的に検証する、という次の課題である。先の研究においても、ある意味では当然の副産物として、記憶術的思考と類似する美術作品も多く発見された。たとえば、パルミジャーノの素描やティツィアーノ《賢明の寓意》といった作品には、カミッロが論じていた記憶術の方法および具体的イメージとの関連性を見て取ることが可能である。ただし、これらの事例は、あくまで視覚的な類似性を示しているに留まり、具体的な影響関係については未解明となった。

本研究は、これまでの主に文献翻訳および註釈を主とする研究から得られた成果を、具体的な美術作品のフィールドワークおよび分析的解釈へと発展させ、マニエリスムの概念を再検討することを目指すものである。

3. 研究の方法

以下の3つの事例を対象とし、それぞれの成立背景、歴史的文脈、視覚的構造、個々のイメージ表現に関する文献資料の精査およびフィールドワークを行うことが主たる方法および計画である。(事例1)パルミジャーノによる通称「カメリーノ(小部屋)」(1523年頃、フォンタネッラート、ロッカ・サンヴィターレ)、(事例2)コレッジョによる通称「カメラ・ディ・サン・パオロ」(1518-1519年頃、パルマ、サン・パオロ修道院)、(事例3)さらにグロテスク(怪物的イメージを創造するという点で記憶術の方法と至近距離で共鳴しうるもう一つの表現方法)および異なる表現媒体の組み合わせ(たとえばフレスコと金属、ストゥッコと木彫)をとともう幾つかのモニュメント(ピントリッキオによるボルジアのアpartment、ロッソ・フィオレンティーノと工房による「フランソワ一世のギャラリー」、ペリーノ・デル・ヴァーガによるパラッツォ・ドーリア)。

(事例1)パルミジャーノ「カメリーノ」における分析観点

ヴォールト天井の中心に置かれた鏡は、「大きな泉」を意味するフォンタネッラートという地理的環境、および堀に囲まれた城塞(ロッカ)という空間的環境といかなる関係を結んでいるのか。そしてその構造は、側壁面に描かれた神話的世界(豊かな植物や果物で構成された一種の建築空間、ディアナとアクタイオンの神話、麦穂をもつ女性像と子供たち、収穫をしている有翼プットたち)といかなる関係をもっていたのか。さらに、その視覚的構造とイメージは、観者にいかなる意味と経験をもたらしたのか。

(事例2)コレッジョ「カメラ・ディ・サン・パオロ」における分析観点

女子修道院における修道院長の住居において、ヴォールト天井の中心に置かれた月(修道院長ジョアン・ダ・ピアチェンツァの紋章)およびそれを取り囲む多様なイメージ(暖炉に描かれたディアナ、16のルネッタに描かれた神話的ないし寓意的イメージ)は、いかなる機能と意味を、修道院長および修道女たちにもたらしたのか。さらに、隣室におけるアレッサンドロ・アラルディによる「グロテスクの間」(1514年)は、コレッジョによる装飾と対照的に、混沌としたグロテスク装飾を旧約聖書やヒエログリフのイメージを結びつけている。この部屋ではいかなる記憶術的要素が見いだされるのか。

(事例3)記憶術と類縁関係にあるグロテスク、素材の混交を顕著に示す例

ピントリッキオにおいてはグロテスク装飾と「牡牛」をめぐるボルジア家の神格化という主題はいかなる結びつきをもつか、およびフレスコと金の併用という同時代的にはきわめて特異な方法はいかなる意味を持つのか。ペリーノとロッソにおいては伝統的イコノグラフィーを改変するという方法が、木彫とストゥッコの併用のような、異なる素材の組み合わせとどのような関係にあるのか。

4. 研究成果

(事例1)パルミジャーノ「カメリーノ」に関しては、水面と鏡を同一視する魔術的思考が真の核心的主題であるという解釈に基づき、イタリア美術史に関する論文集において論文として発表した。この論文で述べた内容の一部(特にカメリーノにおける魔術的要素)は、パルミジャーノを中心とするパルマ美術の権威であるエリザベッタ・ファッダによる論考(2018年)の基本的解釈を先取りしたものとなった。また、この事例に関する研究からは、パルミジャーノの絵画制作における魔術的思考の反映という副産物的なテーマが生まれた。このテーマに

関しては、下記の論文集(『魔術の生成学』)の中で現時点での分析結果を発表した。
(事例2) コレッジ「カメラ・ディ・サン・パオロ」に関する論文集における論文、ピントリッキオによるボルジアのアパートメントに関する論文は、それぞれ『図書新聞』の書評(日本におけるイタリア美術研究の第一人者、宮下規久朗氏)により果敢な成果として評価された。
(事例3) 加えて、これらのモニュメントに関する研究成果、およびそれらには含まれなかった記憶術、グロテスク、魔術的思考とマニエリスム形成期の多様な事例との関係に関する考察と分析を、博士論文(東北大学、2018年)としてまとめた。2019年5月現在、この博士論文の内容を公刊するために改稿および資料の追加と整理を行っている。

また、日本の江戸時代における記憶術の影響という副産物的テーマも浮上してきたため、『物覚秘伝』という興味深いテキストに関して、ルネサンス期の記憶術との比較を通じた分析を行った。さらに、記憶術研究の第一人者リナ・ボルツォーニの著『クリスタルの心』の翻訳出版も行った。イタリア・ルネサンス美術と記憶術の関係に関する日本での研究を活性化することに資するという意味で、本研究の成果に含まれると考えることができる。日本およびアジア地域におけるヨーロッパ的記憶術の影響および受容の問題についても、研究代表者のこれからの課題となった。

しかし、本研究の過程および成果で得られた最も重要な発見は、記憶術が本来有していた魔術的思考および神秘主義的世界観が、個々の作品ないしモニュメントの機能、活用方法、観者の経験内容に深く関与しているという可能性である。本研究で検討した美術作品の多くは、魔術的・神秘主義的思考を単に図解するばかりでなく、視覚的構造および受容モードそのものにおいて、観者に魔術的ないし神秘的な経験をもたらすように表象されていた。

この新たな発見およびそれをさらに深く追求するという課題に関して、研究代表者である足達は、イタリア・ルネサンス美術における魔術的思考の影響に関する関心を共有し、すでに共著書籍(下記[図書]の)において現時点での分析結果を発表したふたりの共同研究者(金山弘昌[慶應義塾大学]、出佳奈子[弘前大学])とともに研究グループを立ち上げた。最後に、我々の計画は、2019年度科学研究費補助金「挑戦的研究」への申請(「魔術師としての美術家：イタリア・ルネサンスにおける美術と魔術の構造的同調の分析」としてスタートを切ったことを述べておきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

足達薫「『源氏物語』六十四帖の名目を暗記せんとせば 『物覚秘伝』と西洋世界の記憶術」『人文社会科学論叢』弘前大学人文社会科学部紀要、第2号、1-30頁、2017年(査読なし)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計4件)

遠山公一、喜多村明里、足達薫、出佳奈子、金山弘昌、伊藤博明著、『イタリア美術叢書 II 光彩のアルストピア レオナルド・ダ・ヴィンチからミケランジェロへ』ありな書房、99-147頁、259-264頁、2019年

金山弘昌(責任編集)、ダニエル・W・メイズ、市川佳世子、出佳奈子、足達薫、喜多村明里、浦一章、伊藤博明(著)『イタリア美術叢書 I 黎明のアルストピア ベッリーニからレオナルド・ダ・ヴィンチへ』ありな書房、111-193頁、2018年

リナ・ボルツォーニ(著)足達薫、伊藤博明、金山弘昌(訳)『クリスタルの心 ルネサンスにおける愛の談論、詩、そして肖像画』ありな書房、全622頁、2017年

金山弘昌(責任編集)、出佳奈子、足達薫、金山弘昌(著)『魔術の生成学 ピエロ・ディ・コジモからパラッツォ・ピッティへ(イメージの探検学VII)』ありな書房、57-132頁、2016年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

足達薫『15世紀末から16世紀前半にかけてのイタリアにおける美術の変容に関する研究』(博士論文, 東北大学大学院文学研究科) 2018年

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。